芥川龍之介における「江南」

施 小 煒

The writer must be universal in sympathy and an outcast by nature: only then can he see clearly.
——Julian Barnes (1946–)

1. 宿願としての江南：「南清」vs.「満州」

芥川龍之介の中国旅行についてかつて、「訪中の話題が急浮上したのは、大正十年二月半ば、芥川龍之介が二十九歳になろうとする時であった」云々と、わたしは書いたことがある[1]。しかし実は、これはあくまで「前から練って来た中国旅行計画をいよいよ実行に移そうとする段階に入り、龍之介の実質的なパトロン役を果たしている大阪毎日新聞社が具体的に打ち合わせをするための下阪のシグナルを送って来た」ぐらいの意味であり、何の前触れもなく出し抜けに中国旅行の話題が持ち出されたわけでも何でもないのである。

実際、中国へ旅行に行きたいというのは、そもそも龍之介がまだうら若かりし時よりずっと抱いて来た積年の宿願であり、龍之介当人も一度ならずこの願望に言及したことがある。例えば、前年の大正９年（1920）５月９日付、小説家である友人の南部修太郎（1892～1936）宛の書簡においては、次の一節がある。

> 君の支那旅行の経費算用の綿密なのに敬服した。なる可く一しょに行き給え。ボクも貧乏旅行する心算だから。[2]（句読点は施）

下阪して大毎と打ち合わせをするほぼ９ヶ月前のことである。字面のみを見れば、中国旅行の話はこの段階においてかなり具体化されつつあるようであり、しかも訪中の真相がどうやらこの南部に触発された面もありそうに見えるものの、事実はそうではない。龍之介の訪中願望は更に深遠なる前歴のあるものであるし、また、いっぽうの南部修太郎が実際に北京に赴いたのは、大正11（1922）年秋であり、龍之介よりも遅れることおよそ1年半となる。もっとも滞在期間は半年なので、龍之介の自慢する「120余日」（支那遊記･序）に及ぶ大旅行よりもなお日数を上回ることになるのだが。

また、さらに10ヶ月ほど遡っての大正８（1919）年７月30日に、龍之介はいわばパトロン役の、大毎学芸部長を務める薄田淳介こと、かつて象徴主義詩人だった薄田泣菫（1877～1945）宛に手紙を送り、その中においても中国旅行の話が出ていた。それは次の一行である。

1　施小煒「休言竟是人家国」『文藝と批評』（第８巻第３号、1996年５月、文藝と批評の会）、25頁。

2　『芥川龍之介全集７』（筑摩全集類聚、筑摩書房、昭和54年）、264頁。

小生は支那旅行をしない限り、九月頃又書いても差し支へ無之候。[3]（句読点は施）

日付がこれに前後する泣菫宛書簡を現存するもののみ当たる限り、この「支那旅行」の話題に触れたものは一切見つからず、聊か唐突の感は禁じ得ないものの、恐らくは火のないところより煙は立たないであろう。調べてみれば、この年（大正８年）の５月前半に、龍之介は菊池寛（1888 ～ 1948）とともに長崎や関西をまわる旅行をして、その途中大阪では毎日新聞社を訪ね、入社挨拶をして、泣菫を始め社の幹部らに「御馳走になったり方々見物させて」もらったりした（大正８年５月19日薄田淳介宛書簡）[4]。多分その酒宴の場などで、特派員として中国派遣の話が出た可能性が大きい、とわたしは推測する。

なお、遡ることさらに一年前の大正７年（1908）にも、友人への書簡において中国へ行きたいという願望を披瀝している――このように大正７年、８年、９年と、アピールする相手こそ違うものの、どうやら龍之介は毎年のように訪中願望を訴えている観がある。当時上海在住であったらしい府立三中時代の同級生斎藤貞吉（生歿未詳。旧姓西村、親友の一人。後1921年5月19日より二日間、龍之介の蕪湖訪問時には、東道の主人として龍之介を自宅に泊め、案内役も務めた）宛に、龍之介は長文の手紙（11月20日付）を書き、その中では次の如く熱き心情を吐露している。

山本［喜誉司。1892 ～ 1963。同じく府立三中時代からの友人。施注］は三菱へ出て目下支那遍歴中。（中略）僕も支那へ行きたいんだが銀相場は上がっているし、金は更になし。行きたい行きたいだけで暮らしている。その点では君などは大に羨ましいよ。一体上海ぢゃ一月いくらで暮らせるだろう。安ければ僕も一月位行っていたい。金瓶梅を始め痴婆子伝、紅杏伝、牡丹奇縁、灯芯奇僧伝、歓喜奇観などの淫書を読むと、どうも支那人の開化した野蛮性が面白くなってくる。上海の本屋でああいう淫書沢山出ているらしいが、もし上記の外のものがあったら送ってくれ給え。大金でない限り送るから。[5]（句読点は施）

この文章によってわれわれが分かるのは、おおよそ以下のようなことである。

（１）龍之介にとって中国の魅力の一つは――これは芥川一流の、聊か難解な表現だが――「開化した野蛮性」にある。
（２）この「開化した野蛮性」という認識は、金瓶梅を始めとする「淫書」から得たものである。
（３）目的地は上海、期間は一月位、という風に、中国旅行の構想はかなり固まりつつあるらしい。

この、中国へ行きたいという龍之介の文言は、相手が中国在住だから単に人付き合いの

[3] 同上、218頁。
[4] 同上、211頁。
[5] 同上、195頁。

ため好い加減に並べ立てたものではなかろう。むしろ中国に長くいる親友だからこそ憚らずに心底を明かせたのではあるまいかと思う。勿論、こう思うのは故なきものでは決してない。

事実、中国へ行ってみたい、中国を旅行したいというのは長年、龍之介が胸に秘めて来た宿望である。龍之介が最も早くその願望を友人に伝えたのは、明治から大正に改元した直後の1912年８月２日、彼は弱冠20歳、一高の二年後期が終わっての夏休み中であり、級友藤岡蔵六（1891 ～ 1949）への書状においてである。その中では明白に「江南」へ行きたいという気持ちを、龍之介は表したのである。

> 鈴木（未詳。施注）は大連から手紙をくれた。支那料理の饗応をうけて、支那の芝居をみにゆくのだそうだ。うまくやってるなと思う。灰色の平原と青い海の鋼鉄のような面とが目にうかぶ。紅い灯の光になげく鳳管や月琴の声が耳にひびく。
>
> 此頃南清へ行くと人に誘われたが、金がないので断った。満州は黍が疎にはえた中で、黒い豚が鼻をならしているような気がするけれど、揚子江の柳に光る日の光は是非一度あびたいと思う。[6]（句読点は施）

中国に行っている友人への羨望。当面金はないが、中国には行きたい。でも、「満州」は黒豚が黍畑の中で鼻をならしているので行きたくない、行きたいのは「南清」、すなわち中国南部だ、といったことが読み取れるわけである。

さて、文中の「南清」とは、一体どの辺を指すのだろうか。「揚子江の柳に光る日の光を是非浴びたい」と明確に書いてあるところを見れば、とりもなおさず、ここの「南清」というのは、さしずめ「江南」を意味するものと判断して差し支えあるまい。

一方、食わず嫌いというか、自分の目で確認したわけでは決してないにもかかわらず、龍之介は「満州」がひどく気に入らないらしい。大正６年（1907）10月30日に婚約中の塚本文こと後の龍之介夫人宛の手紙においても、次の如き記述がある。

> 兄さん（すなわち前出の山本喜誉司。文の実の叔父に当たるが、齢が近いため、文は「兄さん」と呼んでいる。施注）がこの間満州から匪賊の首を斬る所の画はがきをくれました。斬ってしまったところです。満州は野蛮ですね。あんな野蛮なところを旅行してかえって来て文ちゃんに叱られては可哀そうです。写真をとってかくしている方が悪いのだから、叱るのはおよしなさい。僕もそのうちにうつすつもりです。が、無精だから何時になるか分かりません。[7]（句読点は施）

という風に、「野蛮な満州」に対する嫌悪の情を隠そうとしない。そしてこの嫌悪感を催す理由といえば、日本ではすでに消滅したが――実はざっと50年ほど前の江戸時代には、日本にも同様に斬首刑があったという――中国ではまだしばらく続くことになる斬首刑という処刑法である。いわば「五十歩百歩」ならぬ「五十年百年」と言えようか。

6　同上、18頁。

7　同上、160頁。

一方、これよりわずかに早い二週間前のこと、改元前だからすなわち明治45年（1912）7月20日に、龍之介は同じく一高時代の親友で、生涯敬愛していた恒藤恭（旧姓井川、1888～1967。龍之介の三男也寸志という名も、「恭」の訓読みによるもの。施注）に、英語で長文の書簡――おそらく現存する龍之介唯一の英語による書状だろう――を書き送り、その中においても中国に関する詩情豊かな想像を述べている。

> I read Yusenkutsu, dreaming of a fairly land of sunshine and peach blossoms, where reality turns into a delicious dream and suffering into a life of luxurious pleasure. I wish to forget everything, vulgar and common, in this charming magic land and to live a life, not of man and women, but of gods and goddesses, under the sapphirine sky of this fairly land, enveloped with the perfume of snow-white pear blossoms, with the poet of this fantasia, Chobunsei.[8]（下線は施）

> 僕は『遊仙窟』を読んだ。陽光と桃花の桃源郷を夢見ながら。そこでは現実は甘美な夢となり、苦しみが官能的な快楽の生活に変わる。僕はすべての――野卑な、低俗な――ことを忘れて、かかる魅力的で魔法の国で、この幻想の詩人張文成とともに、この桃源郷の瑠璃色の空の下で雪のように白い梨の花の馨しい香りに包まれながら、人間界の男と女の生活ではなく、男神と女神の生活をしたい。

この、唐代の文人Cho Bunsei（Zhang Wencheng。張鷟、字は文成。660頃～740頃）の伝奇小説 Yusenkutsu すなわち『遊仙窟』によって触発された美しい幻想、桃の花や梨の花が咲き乱れる仙境もしくは桃源郷（fairly land とは、おそらく fairyland の間違いであろう）のイメージは、例えば「黍が疎にはえた中で、黒い豚が鼻をならしている」という「満州」、ひいては北方中国――中国では当時においてもはたまた今日においてもこの地方のことを「東北」と呼ぶのだが――のイメージとまさしく雲泥万里の隔たりであり、いわば対蹠点に位置する正反対な性格のものである。無論、原作者張文成の設定では、伝奇の主人公は、黄河の源を求めて、途中仙窟に紛れ込んだものなので、つまりその仙境というものは、中国北西部の青海省に水源を持つ黄河上流沿岸の某地であるはずだが、対して龍之介のこの「my little kingdom（我が小さき王国）」、すなわち「僕が日夜夢見る」「桜草色の夢」（I dream day and night, a dream of primrose）、「僕の象牙の塔」（this is my ivory tower）というのは、大いに南方中国、強いて言えば「江南地方」の伝統的なイメージに限りなく近いものである――これについては大方二つの理由が考えられる。一つは、張文成の時代においては、もしかしたら黄河上流ではまだ自然破壊は今日ほど進んでおらず、後人に「江南」を連想させる景物がまだ豊富に残っていたかも知れない、ということ。今一つは、文成が紛れ込んだのはあくまで「仙境」だから、そこの風景が周囲のものと異なるのは当然だ、ということである。

ともあれ、龍之介が胸に秘めている、憧れの中国像というものは、さしずめこのファン

8　同上、16頁。

タジックな――Don’t laugh at my childish fantasy![9]（僕の子供っぽいファンタジー＝白昼夢を笑うな）と彼は過敏に抗議しているのだが――、どことなく「江南」的な中国と言えるのではあるまいか、とわたしは推測したい。少なくとも、それは「満州」的な中国では決してないといえば、誰もが納得するはずである。

2. 胸中の江南vs. 眼前の江南

このような、龍之介が胸中に秘める江南的中国像は、言うを俟たず、もっぱら読書により得たものであるに違いない。

日頃の恒常的な読書生活において読んだ数知れぬ中国関係の書物を除き、唯訪中準備のために目を通した書籍だけを数えても、驚愕の数に上る。関係文献よりおおまかに書名を整理してみた（多くは未見。更なる調査分析はまたの機会に譲りたい）。

1　金瓶梅
2　肉蒲団
3　杏花天
4　牡丹奇縁
5　痴婆子伝
6　貪官報
7　歓喜奇縁
8　殺子報
9　野叟曝言
10　如意君伝
11　春風得意奇縁
12　隔簾花影
　（以上中国の艶本類）
13　七十八日遊記
14　支那文明記
15　支那漫遊記
16　支那仏教遺物
17　支那風俗
18　支那人気質
19　燕山楚水
20　蘇浙小観
21　北清見聞録
22　長江十年
23　観光記遊
24　征塵録

[9] 同上。

25　満州
26　巴蜀
27　湖南
28　漢口
29　支那風韻記
　　（以上日本人による紀行地誌類）
30　大清一統志
31　燕都遊覧志
32　長安客話
　　（以上中国人による案内地誌類）

なお、『支那遊記』で言及された中国関係の書物を大雑把に整理して見れば、おおよそ以下のようなものが出て来る。

33　品花宝鑑
34　文章規範
35　唐詩選
36　西廂記
37　笠翁偶集
38　留東外史
39　江南の史蹟名勝
40　山斎客談
41　水滸伝
42　Hangchow Itineraries
43　山家清事
44　円機活法
45　聯芳楼記（瞿祐『剪灯新話』所収）
46　康白情の詩（作品名未詳）

これらの書物をことごとく細読したか否かは知らないが、それでもこのリストは龍之介の訪中準備が如何ほど綿密なものだったかを、教えてくれるはずである。例えば、米国の研究者Joshua A. Vogel氏は、龍之介の「みずから読んだ、または誰かからもらった日本人による旅行記などの先行文献に対する度重なる言及」（repeated mention of travel accounts by Japanese before him that he had either read or been given）[10]に目を配り、次のような指摘を行っている。

On numerous occasions, he cited references to a sight before his eyes in the work of one of

[10] Joshua A. Vogel, *The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862–1945*, Stanford University Press, 1996, p. 260.

the men we have already discussed. He also made reference to Chinese travel writings and especially to Chinese local gazetteers, which he had apparently consulted prior to departure. The mention of an earlier travelogue was not unusual—Japanese travelers rarely tried to go to places others had not been—but Akutagawa was particularly meticulous about his citations, and they gave his accounts a scholarly feel while it still reads with the fluidity of fiction.[11]

多くの場合、彼は目の前の光景に対してわれわれがすでに討論してきた人たちの中の誰かの著作を引用し、また、中国語の旅行記、とりわけ中国現地の案内記にも触れた。これらの書物について明らかに彼は出発前に調べていた。過去の紀行文への言及は別に珍しいことではないが――実際、日本人旅行者たちは前人未踏の地に足を踏み入れようとは滅多にしないのだ――芥川は自らの引用について特に慎重であり、いっぽうこれらの引用は、虚構の流動性として読み取れると同時に、彼の記述に博学多識の雰囲気をももたらしている。

しかしながら、読書経験から得られた、龍之介胸中のこの「江南的」中国像は脆くも、本場の中国大陸（場所は上海、つまり「江南」。たとえそこが伝統的な江南地域の端に過ぎぬと言えども）に足を踏み入れた途端、がらりと音を立てて崩れ落ちたようである。「眼前の江南」と「胸中の江南」、眼前の中国と胸中の中国、両者間の落差はあまりにも大きいからである。失望を隠せない龍之介は、吐き捨てるようにこう言った。

現代の支那なるものは、詩文にあるような支那じゃない。猥褻な、残酷な、食意地の張った、小説にあるような支那である。

（上海遊記・八　城内〔下〕）[12]

いわゆる「詩文にあるような支那」とは、すなわち書物や絵画、書などを通して形成された、憧れの詩的な中国、換言すればつまり龍之介「胸中の江南」であろうが、それが見事に「小説にあるような支那」、言い換えれば即ち「小説的な中国」という「眼前の江南」に打ち砕かれたのである。

3.「江南＝中国」vs.「江南＜中国」

上海においてのみならず、実は杭州においても、蘇州においても、更には揚州や南京、蕪湖などにおいても、押し並べて「眼前の江南」は容赦なく、「胸中の江南」を木端微塵に打ち壊していくわけだが、当然ながらそこには例外も無きにしも非ずである。しかしながら地理的には、それは「江南」ではなく、いわば北中国の代表的都市、北京なのである。

北京着。北京はさすが王城の地だ。此処なら二三年住んでも好い。

---

11 Ibid.

12 『芥川龍之介全集６』（筑摩全集類聚、筑摩書房、昭和54年）、13頁。

夕月や槐まじる合歓の花

（大正10年６月14日付、岡栄一郎宛絵葉書[13]。句読点は施）

北京にある事三日。既に北京に惚れこみ候。僕東京に住む能わざるも、北京に住まば本望なり。昨夜三慶園に戯を聴き、帰途前門を過ぐれば、門上弦月あり。その景色、何とも云えず。北京の壮大に比ぶれば、上海の如きは蛮市のみ。

（大正10年６月21日付、室生犀星宛絵葉書[14]。句読点は施）

僕目下支那服にて毎日東奔西走しています。此処の御府の画はすばらしいものです。（中略）北京なら一二年留学しても好いと云う気がします。

（大正10年６月24日付、下島勲宛絵葉書[15]。句読点は施）

御府の画にはすばらしいものがある。画のみならず支那を是非一度君に見せたい。

（大正10年6月27日付、小穴隆一宛絵葉書[16]。句読点は施）

このように北京が大いに気に入ったあまりに、愛着の念が中国全体に波及した模様で、そこで絵画のみならず、「支那」そのものまでを親友の画家小穴隆一（1894 ～ 1966）に勧めたわけである。

もっとも、このような気持ちの変化が、健康状態と関連していることを見逃してはならないかも知れない。上海上陸直後、ぶりかえした風邪が昂じて肋膜炎を誘発し、緊急入院を余儀なくされ、20日間にわたって病院に蟄居せざるを得なかったし（５月４日付、江口渙宛絵葉書）、張り切った気分をたいそう害してしまい、周囲の物事を見る目にも多少はマイナスの影響を与えたことが考えられる。それに比べれば、「その後［多分上海を離れた後をさすのだろう。施注］引き続き壮健」（６月14日付、芥川道章宛書簡）[17]、つまり健康状態には問題なしとなると、健やかな体にのみゆとりある心が宿されるらしく、周囲に向ける視線はいくらか厳しさが和らいだと推測して良かろうか。

勿論、こうした皮相的な理由のみならず、もっと深層的な原因があるに違いなかろう。上海と同様、龍之介は天津のことも気に食わないようだ。

僕――こう言う西洋風の町を歩いていると、妙に郷愁を感じますね。

西村さん――お子さんはまだお一人ですか？

僕――いや、日本へぢゃありません。北京へ帰りたくなるのですよ。

（雑信一束・18　天津）[18]

---

13 『芥川龍之介全集７』、323頁。

14 同上。

15 同上、324頁。

16 同上。

17 同上、323頁。

18 『芥川龍之介全集６』、105頁。

天津に来た。此処は上海同様、蛮市だ。北京が恋しくてたまらぬ。
たそがれはかなしきものかはろばろと夷の市に我は来にけり（後略）
（大正10年７月12日付、小穴隆一宛絵葉書[19]。句読点は施）

蛮市とそしり、夷の市とけなす。つまり、「この地の感じは支那と云うより西洋だ。しかも下品なる西洋だ」（上海よりの書簡。日付宛名ともに未詳）[20]という印象を持つ上海であれ、はたまたこの天津であれ、龍之介の目には異民族の街として映じているという点では、両者は一致している。明らかに、これは両都市ともに存在している西洋列強の「租界」（天津には日本租界もあり！）を指すものであり、「上海遊記」や「江南遊記」で暴いた「イギリス水兵連」（上海遊記・４　第一瞥〔下〕）や「禿頭のヤンキイ」（江南遊記・５　杭州の一夜〔下〕）の跋扈振りを連想させる表現である。

ここで、龍之介における中国認識の変化が認められよう。訪中前は、書物や文物により得た中国のイメージは、総じて「江南的」なものであり、すなわち「江南」にすっぽり「中国」が覆われてしまったわけだが、実際に中国の地に足を踏み入れ、等身大の中国を目の当たりにしてみれば、「江南」＝中国ではなく、江南以外の部分も視野に入り、「江南」＜中国、つまり「江南」を以て中国全体をカバーすることは出来ない、という認識に至ったのである。

さらに、かつての江南、すなわち「胸中」の江南は、当時はすっかり様変わりを強いられ、「下品なる西洋」が幅を利かせるという「眼前」の、すなわち現実の江南と化してしまった。このような事実を抜きにしては、正しい中国認識は有り得ない。こうしたことを、旅人芥川龍之介はいち早く見抜き、そして人々に伝えようとするのである。

4. 大日本帝国視野内の中国vs. 文士における中国

しかしながら、江南ひいては中国全土で幅を利かせ跋扈していたのは、何も欧米列強のみ、というわけではない。芥川龍之介の祖国、大日本帝国も先を争わんばかりに、大車輪の活躍を見せていた。

とは言え、このような「活躍」は、中国の民衆にとっては時々、とんだありがた迷惑としか認められないのは必至である。龍之介の遊記にもところどころこのような記述が見られる。一例を挙げると、幸か不幸か中国に上陸した初日に、早くも第一瞥にて次の如き活画を見せつけられたのである。

このカッフェはパリジアンなぞより、余程下等な所らしい。桃色に塗った壁には、髪を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いている。それからカッフェのまん中には、イギリス水兵が三四人、頬紅の濃い女たちを相手に、だらしのない舞踏を続けている。最後の入り口のガラス戸の側には、薔薇の花を売る支那の婆さんが、私に不要（ブヤオ）を食わされた後、ぼんやり舞踏を眺めている。私は何だか画入新聞の挿画

19 『芥川龍之介全集７』、324頁。

20 同上、317頁。

でも見るような心もちになった。画の題は勿論「上海」である。

其処へ外から五六人、同じような水兵仲間が、一時にどやどやはいって来た。この時一番莫迦を見たのは、戸口に立っていた婆さんである。婆さんは酔ぱらいの水兵連が、乱暴に戸を押し開ける途端、腕にかけた籠を落としてしまった。しかも当の水兵連は、そんな事にかまう所ぢゃない。もう踊っていた連中と一しょに、気違いのようにとち狂っている。婆さんはぶつぶつ云いながら、床に落ちた薔薇を拾い出した。が、それさえ拾っている内には、水兵たちの靴に踏みにじられる。……

ジョオンズは辟易したように、ぬっと大きな体を起こした。

「行こう。」

私もすぐ立ち上がった。が、我々の足元には、点々と薔薇が散乱している。私は戸口へ足を向けながら、ドオミエの画を思い出した。

「おい、人生はね。」

ジョオンズは婆さんの籠の中へ、銀貨を一つ抛りこんでから、私の方へ振返った。

「人生は、――何だい？」

「人生は薔薇を撒き散らした路であるさ。」

我我はカッフェの外へ出た。（中略）我我の側には、何時の間にか、あの花売りの婆さんが、くどくどと何かしゃべりながら、乞食のように手を出している。婆さんは銀貨を貰った上にも、また我我の財布の口を開けさせる心算でいるらしい。私はこんな欲張りに売られる、美しい薔薇が気の毒になった。この図々しい婆さんと、昼間乗った馬車の馭者と、――これは何も上海の第一瞥に限った事ぢゃない。残念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であった。

（上海遊記・4　第一瞥〔下〕）[21]

引用文が長くなって恐縮だが、さすがに龍之介、無類の才筆、わずかな紙幅で見事に傍若無人の加害者、弱者たる被害者、冷静に眺める傍観者、ちょいと憐憫の手を差し伸べた傍観者、そして憐れむに値するかと再考を促す被害者の野卑さなど、さまざまな人物や錯綜する思いを描いて見せてくれる。

いっぽう、「四馬路（スーマーロー）」にたむろする野雉（イエチイ）は、日本人の姿を見ると、「アナタ、サイゴ」という意味不明な日本語で呼びかけるのだが、龍之介はその「サイゴ」の語源を突き詰めて、次の如く記している。

これは日本の軍人たちが、日露戦争に出征中、支那の女をつかまえては、近所の高粱の畑か何かへ、「さあ行こう」と云ったのが、濫觴だろうという事です。語原を聞けば落語のようですが、何にせよ我我日本人には、あまり名誉のあるはなしではなさそうです。

（上海遊記・14　罪悪）[22]

---

[21] 『芥川龍之介全集６』、８～９頁。

[22] 同上、23頁。

というわけで、「一度は亜米利加の砲艦が一艘、小蒸気に標的を牽かせながら、実弾射撃なぞをしていた事」（長江遊記・２　溯江）[23] も目撃したのだが、しかしいわば部外者でありながら中国に最大規模の軍隊を派遣し、利権争いをめぐっては最もなりふり構わず突出していた外国勢力は、何といっても日本を措いて他に無い。したがって、龍之介が各地で「排日」気運が高まるのを身を以て体験せざる得ないというのも、当然の成り行きであろう。数多ある記述から一例だけ引いておく。

> 長沙の天心第一女子師範学校並に付属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰う。女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使わないから、机の上に筆硯を具え、幾何や代数をやっている始末だ。
>
> （雑信一束・７　長沙）[24]

面白いと今日の中国人として感じるのは、こうした「排日」言動に対する龍之介のリアクションだ。一例を引こう。

> 聞けば排日の使嗾費は三十万内外とか云う事だが、この位利き目があるとすれば、日本の商品を駆逐する上にも、寧ろ安い広告費である。
>
> （江南遊記・16　天平と霊巌〔上〕）[25]

日本国民（当時は「臣民」という言葉を使っていたか？）としては、どちらかというと、むしろ平均的な反応であるというべきか。実際、龍之介本人も、この中国における大日本帝国の勢力拡大の恩恵を、骨身に沁みて感じていたことがある。時恰も戦乱に激しく揺り動かされる、いわば稀有の激動期にあり、龍之介は「余り愚図愚図していると、返れなくなる」と真剣に危惧して、直に北京から山東へ出て、青島より海路をとり、帰国する計画を立てたほどである。計画変更を知らせる書簡には、このコースを取る理由について次の如く記されている。

> 山東は殆日本故、済南へ行けばもう帰ったようなものです。
>
> （大正10年６月14日付、芥川道章宛書簡）[26]

山東省が日本の縄張りに納められたことは、このように、日本臣民にとって、場合によっては、いい事もちょいとあるようだ。いや、ちょいとじゃない、大いにあるようだ。しかしそれでも、このような大日本帝国の中国「進出」に対する龍之介の思いは、明瞭な形で示されたことはなく、掴みがたいところがあると言わなければならない。例えば、当時既にすっぽり日本の勢力圏に取り入れられた「満州」の奉天で、集団を成す日本人の大群を

---

[23] 同上、90頁。

[24] 同上、103頁。

[25] 同上、61頁。

[26] 『芥川龍之介全集７』、323頁。

見たときの感想を、龍之介は次の如く漠然としながらも含みのある表現で書き表している。

> 丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いているのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に賛成してしまう所だった。
>
> （雑信一束・19　奉天）[27]

また、満洲に関しては、故意か否かは見極めがたいが、龍之介はそれらしい記録も感想も殆ど公表していない。発表されたわずかなものに、次の一行がある。

> 高粱の根を匍う一匹の百足。
>
> （雑信一束・20　南満鉄道）[28]

周知の如く、満洲鉄道は、日本が大陸経略のために作った国策会社である南満洲鉄道株式会社によって経営されていた。これについては、もう一人、現代の日本人小説家が次の如き理解を公にしている。

> 満州鉄道（南満州鉄道株式会社）は日露戦争が終結した翌年、ロシアから鉄道線路とその権益を譲渡されるかたちで誕生し、急速にその規模を拡大していった。中国侵略の尖兵となり、一九四五年にソビエト軍によって解体された。[29]

時代の移り変わりの所為か、「侵略の尖兵」など、表現としてはずっと明瞭なものとなっている。でも、高粱は普通、中国原産とされているし、事実、「満州」に限らず、中国北部では大量に栽培されている。また、いっぽうのムカデは有毒なので、日本でも多分そうだろうが、中国では一般的には害虫とされている。この二つのインデックスについて、大正10年当時の芥川龍之介においては、果たして如何なるイマジネーションが働いていたのであろうか。解明は難しかろうが、興味がそそられる問題ではある。

---

[27] 『芥川龍之介全集６』、105頁。

[28] 同上。

[29] 村上春樹『１Q84　Book ３』（新潮社、2009年）、10頁。